



## 中村 佑介 イラストレーター

深い記憶の底に触れるかのようなノスタルジーを漂わせながら、清新な風をはらんだイメージが次々と網膜に染み入っていく。繊細きわまる線と色彩でつむがれる少女の世界に代表される中村佑介さんのイラストは、書籍の表紙や音楽CDのジャケットなどを通して、数多くの人々を魅了してきた。一昨年、その初期から現在までの作品集をまとめた画集『Blue』が反響を呼び、昨年は硬派の詩と批評誌として知られる『ユリイカ』が、その人と芸術を総特集したほどである。この十年間の日本のビジュアルアート・シーンに、最も鮮烈な足跡を残してきた中村さんに、改めてその独自の美学の成り立ちなどを聞いてみた。

—ご両親がクリエイティブな仕事に従事されていた家庭。当然、中村さんの進路も……。

ば、と思いました。たぶん日本のアニメ文化の由来とか、日本人がなぜそれを得意にしたかとかを、美大の卒論のテーマにしたのも、そういうことと無関係ではなかったような気がします。卒論に際しては、日本文化を過去にさかのぼって精力的に調べました。すると、浮世絵に代表されるように、日本人はそもそもから面と線で対象をとらえる術にたけていたことがわかり、どんどん調査が面白くなっていった。その面と線



サラリーマンにはなれませんがね。両親もずっと美大を勧めていたし。絵はちっちゃいころから好きでしたが、たんに自分の趣味の世界に終わらせたくなくて、それを社会に役立つような仕事にしたいという意識は、中学を卒業するころからありました。たとえばマンガ家のアシスタントになりたいとか、ゲームメーカーのキャラクター・デザインを担当したいとか。でも母親から、まだあせる必要はないんじゃない、とりあえずは高校を出なさい、と諭されて。

—それが最終的に、美大への進学につながっていたわけですね。

そうですね。大学では、ゲームメーカーに就職するのにも有利と聞いて、CGコースを選びました。その時点では、自分は企業に入ってデザイナーになるもなるんだらうなと思ってましたね、まだ。ところが、趣味で描いていた絵が、俄然面白くなりだした。女の子の世界をテーマにして、描き始めてからのことです。女性を描くということは、人体を描くということ。それなら石膏デッサンからやり直して、人体表現を極めなければと次第に熱が入っていきました。そのころのほくの絵に対しては、技術はすごいし、懐かしい情感もあるっていうように、好意的な反応も寄せられたのですけど、芸術コースからはマンガと見られるし、デザイナーともいえないし、つまりは「どこにも属さないよ」という感じで描いていたのかな。

の美学は、浮世絵を介して西欧の画家たちに強い刺激や影響を与えたことはよく知られています。が、では後世の日本に対してはどうだったのかというところ、ちゃんとしるべき画家たちに脈々と受け継がれていた。たとえば抒情画というジャンルで活躍した竹久夢二、林静、中原淳一がそうです。ゲーム・キャラクターの美少女なんて、彼らが描いた女性像の足元にも及ばない。ぼくとしては、なんとか彼らの絵の先に進んでいきたいんですよ。



—その女の子の世界、少女像への強いこだわりは何に由来するのですか。

大学時代、ゲーム業界に行こうと就職活動していたので、そのためのセミナーをよく受けたんです。すると、そこでは判で押ししたように、流行するのは美少女恋愛ものといわれ、大人たちの気に入るようなエロっぽい女の子のキャラクターばかりが吹き込まれた。ところが、ぼくにはそんな少女像、女性像が少しもかわいとも、美しいとも思えなかったんです。この業界に就職しても、自分にはとても、こんなに美しくもかわいくもないキャラクターは描く気は起こらないだろうな。そういう違和感というか反発心とかがあつて、自分なりに美しい女性像、人間像をつかまなければ

—書籍やCDなど媒体の違いと表現の関係は。

基本的に絵は同じです。ただ、求められるものが違うので、スタンスは変わりますね。書籍の表紙だと、文章の内容をきっちり視覚化することを心がけていますし、それがCDジャケットとなると、曲がどうこうというよりも、アーティスト像を伝えることを重視しています。書籍については、昔からどうして小説の表紙がつまらないんだらうと不満だらけだったので、見た目の華やか、謎の仕掛けとか創意工夫を凝らしていますよ。ほかにバンドやマンガ、エッセイなどにも手を出しますが、仕事のど真ん中はあくまでイラストレーター。ただ、「しゃべれるイラストレーター」とかいう触れ込みで、テレビのバラエティ番組に出てみたいという色気はありますけどね。

〈文・三田晴夫／写真・藤原亜希〉

中村佑介(なかもら・ゆうすけ)

イラストレーター。1979年宝塚生まれ。

96年大阪芸術大学デザイン学科・視覚情報コースに入学し、パソコンによるデザインやコンピュータグラフィック、手作業による銅版画やシルクスクリーンを同時に学ぶ。また在学中に演劇、映画、音楽制作にも携わり、同コース助手を2年勤めた後、2002年からフリーランスに。

ASIAN KUNG-FU GENERATIONや数多くのアーティストのCDジャケットには定評があり、近年では赤川次郎、石田衣良、森見登美彦などの書籍カバーも数多く手掛けている。他にも漫画作品や、エッセイ、S▶NS(セイルズ)としてのバンド活動、インターネットラジオなど、表現の幅は幅広い。09年8月、200ページ以上に及ぶ10年間のイラストの軌跡を取った待望の初作品集『Blue』を飛鳥新社より発売。